

人の開閉行動における取っ手の視覚情報に関する研究

西山紀子

A study on the visual information of the configurations of handles to our motions in opening and closing doors

NORIKO Nishiyama

1. 研究の目的

人の開閉行動は通常、開口部を見る→戸に近づく→取っ手を見る→取っ手に触れる→操作する、というプロセスをたどる。本研究の目的は人の見え方に着目し、この一連の動作の流れにおいて取っ手がどのように見え、またそれをどのように読み取っているのかを調べ、開閉行動に関わる取っ手からの情報がいかなるものであるのかを明らかにすることである。

2. 調査の方法

これまでの研究により、縦棒状の取っ手（40～50cmのもの4種類および120～150cmのもの2種類）と面状の取っ手（丸形3種類および四角形1種類）について、人が受け取っている開閉行動に関わる取っ手の視覚情報として、「操作」「使い心地」「視認」「印象」の4つを抽出することができた。40cm～50cmの縦棒状の取っ手が比較的良好な評価を得ているものの、全体的には戸を開ける上では悪い評価の多いことがわかった。^{*1}

そこで本編では、さらに縦状で40～50cmの円弧形およびコの字形の取っ手について調べることにする。調査はこれまでの研究と同様に、実際に建物に取り付けられている戸の写真を見せて自由な発話を行い、記録を取るものである。使用した写真は建物の外から撮ったもので、取っ手の詳細が十分に認識できるよう、かつ戸の全容が入るようにしたカラーのもの8枚である。^(注) (図-1) 1枚ずつをパソコンのモニターに映し出し、被験者はそのモニターを取り囲むように着席した。調査を確実なものにするため対話形式をとり、時間に制限は設けず、それぞれについて意見が全く出なくなった時点で終了した。被験者はこれまでと同じ大学2年生11名（男4名、女7名）で、うち7名は建築系学科に属している。なお被験者には事前に本研究のテーマのみを告げておいた。得られた発話の内容はそれぞれの写真ごとに書き起こして、話題によりグループ分けをし、グループごとに「取っ手」「戸」「周辺状況」「心象」「行動」の5項目に分類、整理した。またこのときそれぞれの項目の発話は、戸の開閉について良い評価を与えているもの、悪い評価を与えているもの、どちらでもないもの

に分けた。さらに取っ手の内容については「形状」「素材」「色」「位置」「意匠」の5項目に細分類して分析、考察を行い、その結果をモデル化した。(図-2)

3. 結果と考察

円弧形およびコの字形の取っ手についても、人が受け取っている開閉行動に関わる取っ手の視覚情報として、「操作」「使い心地」「視認」「印象」が抽出された。

形状について発話が最も多く、内容は「操作」「印象」に関わるものが大半を占めていた。特に「印象」については、円弧状であると引きたくなる、円弧状であると引く、コの字形であると引きそう、として縦棒状や面状の取っ手の場合に比べてより具体的になっているところに特徴が見られる。従って戸の大きさや素材による重量感に、縦棒状や面状のものほど大きく影響されることなく行動に及ぼしている。素材については光沢のある金属部に「視認」について見にくい、見えないとして悪い評価を与えている。しかし光沢のある金属部は、濃い塗装色より軽量感を与えるとして色において良い評価が与えられた。またコの字形の縦棒部につや消しの加工が施されている取っ手については、光り方の違いが見やすさにつながるとして良い評価が与えられ、これよりテクスチャが「視認」において重要であるといえる。色については金属の素材色よりも塗装色のものの方から多くの情報を得ていることがわかる。意匠については見た目の美しさとしてシンプルな形やスムーズな形があげられ、円弧状のものは良いとする。また周辺状況として戸の向こう側に置かれたものが見えることと、心象として各人の体験が、開閉行動に及ぼす影響の大きいことが確認された。

4. まとめ

今回の調査により人は、円弧形およびコの字形の取っ手から開閉に関するより具体的な視覚情報を受け取っており、そのため縦棒状や面状のものより良い評価の与えられていることがわかった。発話にばらつきが少なかったことから、人によって受け取る情報に大きな差異のないことが推測される。なおこの調査では対話形式をとったため、今後検証を行う必要があると考えている。

